道志ダム
（昭和30年完成） 貯水容積 61.61万m³

相模ダムに貯める水を確保するため、相模川の支川である道志川に建設しました。

相模ダム
（昭和22年完成） 貯水容積 4,820万m³

工業生産の増強や人口増加による水道使用量などの増大に対応するため、日本初の河川の総合開発事業により建設しました。

城山ダム
（昭和40年完成） 貯水容積 5,120万m³

高度成長期の水道使用量などの急増に対応するため、神奈川県、横浜市、川崎市及び横須賀市が共同して、相模ダムの下流に建設しました。放流した水は寒川取水堰で取水します。

宮ヶ瀬ダム
（平成13年完成） 貯水容積 18,300万m³

さらなる経済発展を支えるため、建設省（現国土交通省）が相模川の支川である中津川に、首都圏最大のダムを建設しました。放流した水は相模大堰で取水します。

三保ダム
（昭和54年完成） 貯水容積 5,450万m³

さらに急増した水道使用量などに対応するため、神奈川県、神奈川県内広域水道企業団及び東京発電株式会社が共同で酒匂川に建設しました。放流した水は飯泉取水堰で取水します。

ヒミツ 1

県内のダムで水道水を自給自足

神奈川県は、水道水の約9割を相模川と酒匂川2つの水系から取水しています。残り1割の水源も県内にあり、水道水を自給自足することができています。相模川水系には相模ダム、城山ダム、道志ダム及び宮ヶ瀬ダム、酒匂川水系には三保ダムがあり、これらのダムは「かながわの水がめ」として大きな役割を担っています。このうち、宮ヶ瀬ダムは国が管理していますが、そのほかのダムは神奈川県が管理しています。

ダムは先祖伝来の住み慣れたふるさとを提供していただいた水没移転者の皆さまのご理解とご協力によりつくられています！

ヒミツ 2

国と県が手を取りあって、「総合運用」

県の相模ダム・城山ダムの集水面積は、約1,200㎢と大変広いのに対して、国の宮ヶ瀬ダムの集水面積は約100㎢。また貯水容量で比較すると、県のダムの合計は約1億㎥であるのに対して、宮ヶ瀬ダムは約1.8億㎥と県のダムの約2倍です。つまり、県のダムは「水が貯まりやすいが、たくさん貯められない」、宮ヶ瀬ダムは「水が貯まりにくいが、たくさん貯められる」という特徴があります。そこで、県のダムと宮ヶ瀬ダムとを二つの巨大な地下トンネルでつなぎ、効率よく水をやり取りする「総合運用」を行っています。この「総合運用」に加え、極力「無駄がない水運用」をあわせて行う全国でも類を見ない、神奈川県独自のきめ細やかな水運用によって「渇水に強い神奈川」を可能にしています。

かながわの水がめ総合運用のしくみ

ヒミツ 3

相模川、酒匂川、ふたつをつなぐ導水ネットワーク

相模川水系の下流には「相模大堰」と「寒川取水堰」、酒匂川水系の下流には「飯泉取水堰」があり、これらの堰は、水門を操作することで河川の水位を一定に保ちながら安定的に取水を行う施設です。酒匂川下流の「飯泉取水堰」から川崎市内の神奈川県内広域水道企業団西長沢浄水場までをつなぐ長大な導水管と、その途中で連絡している相模川水系の「相模大堰」からの導水管を利用することで2水系間の水を相互に融通できるのです。酒匂川水系は頼もしい後ろ盾のような存在。導水管のほとんどは地下にあるため、目にする機会はあまりないかもしれませんが、「渇水に強い神奈川」を支える縁の下の力持ちです。

相模川水系ダム管理事務所

寒川取水堰